幽霊？拳で叩き伏せろッ！！！

夢餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幽霊？拳で叩き伏せろッ！！！

【Ｎコード】
Ｎ９５２８Ｙ

【作者名】
夢餓鬼

【あらすじ】
「死ネやコラァーーーーーーーーーーー！！！！！！（怒）」ひょんな事から幽霊が見えるようになった小太郎。…そんな彼の趣味は『幽霊イジメ』！！転校してきた少年が、小太郎を激闘の世界に引きずり込む！！…はたして、小太郎は無事でいられるのか？
※シャーマンキングの二次小説を見てみて、余所～以上に少なかったことに絶望しました！！私の作品を見て、もっとシャーマンキングの二次小説を増やせるよう、頑張って面白い物を書いていきたいです！

幽霊と踊る（？）少年（前書き）

はじめまして！！

この作品は作者の気まぐれなため、更新は不定期です。

幽霊と踊る（？）少年

彷徨える死者の魂

大地の森に息ずく精霊　そして神仏――――

それらと自由に交流し、人間ではなしえぬ力をこの世に行使する者たちがいる

彼らは　『シャーマン』　と呼ばれた

「…ファァァ～～～～～ァッ！……あ～～～かったるぃ……（眠）」

埼玉県×××市ふんばりが丘…私立森羅学園に続く朝の通学路を一人の少年が歩いていた。

欠伸を掻きながら眠そうに歩いて来る少年、……彼の名は『江碕(えざき)小太郎(こたろう)』と言う。森羅学園中等部、1年C組の13歳の中学生だ。

…外見は黒目黒髪と日本男児の色をしている。

眉は細長く、眼は他人と比べると少し睨んでおりいつも不機嫌な顔をしている印象が特徴的な顔だ。

服装は夏用の制服を着ているが…シャツのボタンは全部はずし、中に来ている黒色のタンクストップが見えている状態になっており、全体的に見るとガラが悪い感じが滲み出ている…

身長160cmと中学生にしては少し高めの方であり、それが返って周りを威圧するように感じられる。

…傍から見れば普通の中学生に見える彼にも、誰にも言えない秘密がある。

それは、俗に『幽霊』と呼ばれるモノを、彼は見る事が出来るのだ。

…彼が幽霊を見れるように目覚めたのは小学5年生の前期頃で、切欠は『両親の死』出会った。

その日、学校から帰ってきた小太郎は家で自分の両親が返ってくるのを待っていた。…しばらくすると電話がかかってきて、小太郎が受話器を取ると両親が死んだ事を知ってしまう。…死因は『交通事故』。

在り来たり過ぎるかも知れないが、それを知った小太郎はひどく悲しみ、大声を出しながら一晩中泣きじゃくっていた。

以来、親戚中をたらい回しにされ…中学に入る時、小太郎は一人暮らしをする事に決めた。
家賃は親から受け継いだ遺産を使い、高校になったらバイトでもして稼いでいこうと考えている。

…そして、そんな彼の趣味はというと……

「邪魔だぞ……消えろやコラァァァァァァァァ！！！」
《…ヒィィィィィ！？お助けぇぇぇぇぇぇ！！》
…交差点で小学生の女の子を荒い息で見ていた小太りの男の幽霊。
それを見つけた小太郎はその幽霊のそばまで歩いていくと…突然、罵声を飛ばしながら右足で幽霊を踏みつけ始めたのだ。

…小太郎の攻撃は幽霊にも通っているようであり、踏みつけるごとに小太りの幽霊は奇声を上げて許しをこう。
《ちょっと！？本当にやめてくださいッ！拙者が一体、何をしたと言うのでゴザルカ～～！！？》
「うるせぇぇぇぇぇぇ！！！朝っぱらっからウザってーもん見せつけやがって！！……存在自体消え失せろやコラーーーーー！！！！！」
《ブヒイイィィィィィィィィィィ！！！！？？》
…もうおわかりだろうが、彼の趣味は『幽霊いじめ』である……

流稀は幽霊が見えるようになった頃、見たくもないのに見えてしまう彼らを心底怖がった。…しかし6年生後半、さすがにストレスが溜まったのか幽霊に下剋上開始。流稀は視界に幽霊が入ると、片っ端っから幽霊をシバキ倒しまくった。

以来…流稀は幽霊全般が嫌いになり、今ではサンドバックよろしくヒドイ目にあわせていた。

「…チッ！今日はこの辺で勘弁してやるよ…」

《……ブヒィ～……》

小太郎は一通り幽霊をシバキ倒すと、自分の近くにいた中学生達がこちらを向いているのが眼に入る。

…普通、幽霊は一般人にしか見えない。傍から見れば小太郎は、一人で大声を上げながらジダンダしているように見えるだろう。周りの学生たちがヒソヒソと影口をたたく。…しかし、

「…あー？……失せろや…ッコラ…！！！」

生徒達を見ながら低い声で言う小太郎。すると言われた生徒達は影口を止め、一斉に前を向いて歩き始めた。

…ちなみに、流稀は人間も嫌いである。

小太郎は顔のせいか、学校の先輩たちにも呼び出しなどくらい…流稀は逆にボコボコにして叩きのめす。

おかげで中等部では喧嘩最強とまで言われ、結構恐れられる存在となっている。

…小太郎の近くに人がいなくなると、またダルそうに学校に向かう。

（…今日も机で眠ろッと…）

そんな事を欠伸をしながら考え、自分の教室まで歩き出す。

…しかし、小太郎は知る由もない。

…今日、転向して来る少年が自分の運命を変える事を、自分がとん

でもない戦いに巻き込まれていくなど、夢にも思ってはいないだろう。

幽霊と踊る（？）少年（後書き）

ありがとうございました

主人公登場（前書き）

感想や評価をもとむ！

主人公登場

朝の出来事の後…小太郎はいつものように教室に入ると、直ぐに自分の机に座りそのまま突っ伏して眠る体制を取る。
どうやら彼は、このままお昼ごろまで眠りに入るようだ。…明らかに眠りすぎである。

…しかし小太郎が眠りに着こうとした瞬間、大声で話し合う話が聞こえる。

「だから本当に見たんだってば！！あの墓地で！幽霊が！星見ながらワイワイやってたんだよ！」

（…何だぁ、うるせ―なぁ？……ぶっ殺すぞ……！？）
いきなりの騒ぎ声で不機嫌になる小太郎。…顔を上げて声の発信源を睨みつけて見ると、何やら興奮した様子で二等身（小っさ！）の同級生が騒いでいた。

「そりゃぼくだってこの目で疑ったさ！」
「俺はお前の頭を疑うぜ――――まん太よ――――」
「うほっ！？」
二等身の子（確かまん太って名前だっけか？）の言葉に同級生が呆れて喋りかけている。…まあ、このご時世でそんな事言ってりゃ普通に頭がおかしいと思うしな…

「幽霊なんてんなもんいるわけねーだろ」
「どうせ何かの見間違いでしょ」
「お前　勉強のしすぎで頭　疲れちゃってんじゃねーの？」
「いや　っつーかこいつは霊に疲れてるんだろ？」

「うまいっ！」
幽霊を掛けた洒落に爆笑する同級生達。
…いや、正直そんなに面白くないぞ！？　むしろサブイボ立ったわ！！
同級生達の言葉でキレるまん太、そこに教師が教室に入ってくる。
「うるせぇぞ何さわいでんだ小山田！Ｈ（ホーム）・Ｒ（ルーム）始めっから席に戻れコラ」
「あッ！先生だ」
教師が来た事で小山田が席に戻り、教室が静かになっ……てねーよ！！メッチャ騒いでるぞ！！？
先生来たってのに生徒達自由気ままに騒ぎまくってんだけど！？ちゃんと席に着かせろよ！！
「…あー…つうわけで今日からテメェらに突然の知らせがあるんだがー」
無視！？この状況で無視！！？何でコイツラほっといてんの！？明らかに話来てねーぞ、こいつ等！？？
…もう、背景の効果音にワイワイ、ガヤガヤ、ギャッハッハッとか明らかに漂ってんだろーが！？
なんだ！？…もうこの教師諦めてんのか！？もう止める気もないってか！！？…教師やめちまえよ！！！
「転校生の朝倉　葉（よう）君だ」
教師がそう言うと、廊下から見るからに『ユルそうな』雰囲気を出

している少年が入ってきた。

…というか、このタイミングで転校生の紹介！！？生徒達もいつの間にか全員席に着いてるし！！？

「…あー彼は家の事情で単身　出雲からやって来たそうだ。っつうわけでテメェらもいろいろ面倒見てやってほしいって…んん！？なんだ小山田！？変なカオして」

教師がビックリしながら人間の限界をはるかに超えるほど口を開けているまん太に質問する。

「…こっ」

その状態で何かを言おうとするまん太、…てか、顎外れてんじゃねーか？

「ここここいつだあーっ！」

（ピキッ…！）

そして突然、大声で叫びながら転校生に指を指す…周りの同級生もビックリし、伏せていた小太郎の額から青筋が浮き出る。

「みんなッ！こいつだよこいつが例の幽霊男さ！」

「ゆ…」「ゆうれいおとこ…！？」

（……）

まん太の言葉に教室がざわついていく。…それを見ていた葉は少し何か考え…、

「幽霊なんているわけないだろ　っていうかお前　誰？」

「何いい――――――！！？」

まさかの知らない人発言！！転校生の言葉で周りは爆笑し、まん太は机を叩きながら絶叫する。

すると絶叫していたまん太の後頭部に剛速球の上靴がブチ当たった！！

「いった――――――――！！？」

突然の痛みにビックリしながら上靴の投げられた方向を涙目で見る。

「…うるせ――――。…次喋ったら、ぶっ殺すぞ……！」

…滅茶苦茶不機嫌にまん太を睨みながら低い声で呟く小太郎。

そのやり取りを見ていた生徒達は一斉に口をふさぐ。

…葉もその光景を見ていたが、小太郎の方を少しだけ見つめるだけであとはユルそうにしていた。

しかしそんなやり取りなど知ったこっちゃないとばかりに、小太郎は静かになった教室の中で机に突っ伏して惰眠を貪り始めたのだった。

次に小太郎が眼を覚ました時はすでに放課後になっており、教室には誰ひとり残ってはいなかった。

…どうやら、彼は一日中眠っていたらしい…勉強しろよ。

小太郎は欠伸を一つして立ち上がると、かばんを持って学校から帰宅することにした。

帰宅途中、小川が流れている橋を歩こうとすると小太郎は意外な人物に出会った。

今日転校してきた少年が橋の手すりに腕を置き、何やら空を眺めながらボーとしていたのだ。

…そんな葉を眺めていると、今日自分のクラスに転校してきた葉という人物だと小太郎は思い出す。
一体こんな所でなにしてるんだと葉を見て観察していると、突然葉は息を吐き出し…

「あ――――――っ自然と一体になるって、気持ちいーなーっ！」
そんな事を言いながら笑顔で言う葉。…は？一体何言ってんだコイツ？……サイコ野郎か？

「なんじゃそりゃあ！！」
「んあ？」「おお！？」
…小太郎が胡散臭そうな目で葉を見ていると、突然電柱の陰から小山田まん太がツッコミを入れてきた。いきなり怒鳴ってきたので小太郎も驚いた声を上げてしまう。

「ああッ！　しまった！つい突っ込みが！！…て、なんで江碕までここに！？」
「あれ？…お前たしか教室で寝てたやつ」
「…俺がいちゃあなんか不満でもあるのか…てめぇ…ッ」
小山田のツッコミに小太郎の存在を知る葉と少し低めに呟く小太郎。
…取り合えず三人一緒に土手に並んで座り話をする事に。

小山田の話によると…今日の教室の一件で納得しきれないまん太。
絶対正体をあばいてやる！！！っと一人意気込み…放課後、葉を隠れながら尾行することに。
そしてこの橋に立ち寄った葉を見はる事約三時間！！…さすがに苛

々しながら見つめていると、突然葉のキチガイ発言勃発！さすがに我慢できなくなりつい大声でツッコんでしまい現在に到る。と…、…なんて言いますか、ハッキリ言って時間の無駄以外の何者でもない！！

三時間もこんな所でボーっとしているコイツもそうだが…それをズーっと見ていたまん太も相当である。

そんな会話を聞いていた小太郎は、心底呆れた様子で二人を見下していた。

「ははは　そうか――――――それでオイラの後をつけてきたのか。そりゃ悪いことをしたなー」

「……！？」

そんな明らかなストーカー発言にも葉は笑いながら喋っている。その様子にまん太も疑問になってしまう。…ちなみに、小太郎にそんな真似をした場合は問答無用で叩き潰されるだろう…。

「え…！？怒ってないのかい！？」

「なんで？お前オイラが学校で知らんぷりしたからついて来たんだろ？」

「…んなっ！？じゃっ　じゃやっぱり！」

普通に幽霊が見える事をカミングアウトする葉…拍子抜けしすぎて逆に驚いた小山田と小太郎。

「いやぁ…オイラ面倒くさがりだからさぁ　学校で秘密がばれて騒ぎになるわけにはいかんかったのよ」

「…ひ　秘密……！？」

「ああ　オイラ　実は修行のためにやって来た　『シャーマン』な

んだ」
…いきなり自分の秘密を喋り出す葉の言葉にこの場が静かになる…。
「シャ…　シャーマン……！？（シャーマンって何だ！？　ってい
うかこいつ…！！それは秘密なんじゃなかったのか――――――
――ッ！？　何故あっさり言う！？）」
（…今日のメシ何にすっかなー…？）
「！？」
…葉がいきなり秘密を暴露したため小山田は！？マークを浮かべ混
乱し、それを不思議がりながら笑って見ている葉。…小太郎はもう
すでに話を聞いておらず、今日の晩御飯の献立を考えていた。

「うえっへっへっ　シャーマンはあの世とこの世を結ぶ者　困った
事があったら　いつでも呼んでくれよ力になるぞ」
そう言いながら立ち上がると、葉は夕日の沈む方に歩いて帰って行
った。
…そして、この場に残ってしまった二人はその後姿を眺めて見てい
た。

「…なんなんだ、アイツ…ッ！？」
「…よしっ！今日は鮭の焼き魚にしよう…」
…まん太の疑問に夕飯の献立を言う小太郎。

…ちなみに、小太郎の夕飯はコンビニ弁当になっていた。

憑依合体での戦闘（？）（前書き）

シャーマンキングの小説、もっと増えればいいのに…。

感想などお待ちしております。

憑依合体での戦闘（？）

葉のカミングアウトから一日経ち…小太郎は自宅で寝苦しい夜を過ごしていた。

あれから家に帰って学校に行き、そのまま放課後まで眠っているために今日はなかなか眠れない。

…というか、こいつ学校に何しに行ってるの？

寝むれない小太郎は「そう言えば…ッ」っと学校で寝る前の出来事を思い出す…。

…今日も机で眠ろうとする小太郎。だが、昨日に引き続き教室が騒がしい。

イラつきながら音のする方に眼を向けて見る…すると、昨日転校生と一緒にいた小山田が痛々しく身体に包帯を巻き付けた姿が目に入った。

なんでも、夜中に近くにある墓場に一人で忍びこみ、墓場に屯っていた不良どもにボコボコにされたらしい…。

それを聞いた小太郎はまん太を見て、

（…フッ、間抜けな奴…）
っと、結構ヒドイ事を考えながら眠そうな目で眺めていた。

…その後、同級生達に笑われていたまん太に転校生が介入してきたらしいが…残念ながらその後、小太郎は惰眠を貪り始めたので良くはわかっていない。

つーか、他人の事などハッキリ言ってどうでもいい小太郎は気にするそぶりも見せなかった。

…そんな事を思い出しながら眠ろうとする小太郎だが…部屋が暑苦しすぎて全く眠れない。

「ッ〜〜ガアァァァ！！　暑ッッつ苦しいんだよ！！！！　死ねよ、温暖化ッ！！！！」
小太郎は理非人過ぎる事をどなり声を上げながら部屋を出ていく…
どうやら散歩に出かけるようだ。

勢いで外に飛び出し、取り合えずブラブラと夜の街を充てもなく歩き回る。

…小太郎が墓場の前を通ろうとすると、突然墓の方から叫び声が響いた。

「なんだ…？こんな時間だから幽霊どもが騒いでんのか……ちょうどいい！
…俺のストレス発散にご協力してもらおうか！！？（笑）」
快楽殺人鬼発言全開の事を言う小太郎は墓場の方に顔を向けると、ニヤッと効果音が付きそうな暴力的な笑みを浮かべてそのまま墓場の中に勢いよく突入した！

…コイツ、絶対に主人公向いてねぇ！！

墓場に近づいていくにつれ、声がさっきよりも鮮明に聞こえて来る。
…アレッ？っていうかこの声…

「って　もう目の前だし！！！かえって助からないから！帰して！」
「あァ…！？テメェ…今オレらになんつった……？こっから出ていけ…！？
…ブッ！殺されてあの世に行きてェのかコラァ」

小太郎が声のする方に顔を向けると…そこには葉とまん太、それと明らかに不良ですよと自己アピール満々の男たちが睨みあっていた
…どうやら喧嘩でもおっぱじめるらしい。

そんな緊迫した空気に当てられてか、小太郎がニコニコと笑いながら葉達のいる方に歩み寄っていく。

「よ～二人さん！こんな夜中に何してんだ？…随分面白そ～な事になってるじゃないの（笑）」
「あれっなんだ、おまえ小太郎じゃないか？」

「！？何でまたキミがここにいンの！？…それよりもここから助けてッ！！」
突然、小太郎が登場したことにより二人は驚く。
「あぁん！？また人が増えたぞ、コラァ！！」
「どうします、竜さんッ！？」
向こうも小太郎が現れた事に少しだけ騒ぎ出す。…どうやら、あの『竜さん』と言われたリーゼントが頭の様だな…。
「ッ構わねェ、アイツも一緒にあの世に送ってやるだけだ！」
『さすがは竜さんッ！！！』
どうやら小太郎も一緒に叩き潰すらしい…ていうか、夜中なのにうるせ―よコイツ等。
「っていうか…その　あの世の連中があんたらをメーワクだと言ってるんです」
腕を腰に当てながら言い放つ葉…その言葉を聞いた不良共は爆笑する。
…だからうるせぇって言ってんだろうがッ！！
「ブッ！」
「ぶわ――――――っはっはっ！また霊だとよ！！」
「バーカ！竜さんは霊なんかちっとも怖くねーんだぞ！」
小太郎も怖がんないんですが…それどころか幽霊シバキ上げるんですが。…明らかに霊よりも恐ろしい存在だからね！
「オゥよ！やれるもんなら…」
「やればいいんだろ？」
『！？』
「さっきからもう戦いたくてウズウズしてるんだ　だよな　『阿弥（あみ）
だまる

陀丸』！」
葉がそう言い…その後ろから長髪の侍…『阿弥陀丸』が姿を現わした！！…突然の事にまん太と小太郎もビックリする。

「サッサムライの霊…！？」
「！ビックリしたァ…驚かすなやコラァ！！！（怒）」
《この度は拙者の屈辱をはらす機会を与えて頂き感謝するでござる！　葉殿！！！》
小太郎達の言葉を無視し、相手の方を見て睨む阿弥陀丸。…その言動がさらに小太郎をイラつかせる！

「屈辱！？　屈辱ってもしかしてこの幽霊…！」
「おいコラッ！無視してんじゃねーぞ！？（怒）…たかが霊ごときが俺の話をッ…」
「あの…！！こわされた首塚の主…！！！　『阿弥陀丸』！！！！…伝説の侍！！！（たっ…！たしかに本物のサムライなら木刀なんかメじゃないはず…！　でも…！！！）」
叫ぶ小太郎の言葉を遮り、言葉を放つまん太。それに気付かぬまま恐る恐る竜達の方を見る。

「…オイオイオイ…いいかげんにしろよオイ！　まだ阿弥陀丸とかいうクソの話か？」
（ホラやっぱり奴らにその姿は見えてないし！　もちろん触れる事だって出来ないだろう！　しょせん霊だもの…！！）
葉達の言葉に顔の血管を浮かせながら言う竜、それを見たまん太も身体から冷や汗を流す。

（一体どうするつもりなん…）
「オイ…スペースショット（あだ名）！アパッチ（あだ名）」
竜が名前を呼ぶと筋肉ムキムキの男が二人現れる！…なんか、この

言い方気持ちが悪い。

「！」

「奴らを…ブッ殺せエエ！！！」

リーゼントが叫ぶと、男たちがこっちに向かって勢いよく突進してきた！！

「だあああっ！！ききき来たよ！！どうすんだよ！！　せっかくのサムライも霊じゃ意味ないじゃないかーッ！」

「テメェー等！！だから人の話を最後まで聞きやっ…！」

「ハッハッハッうるせぇな――――」

不良がこっちに向かってくるとまん太が葉に泣きながら縋り付き、葉はなぜか笑いながらこの状況を見ている。

「それじゃ　いっちょ見せつけてやろうか阿弥陀丸」

《ウム》

「お前の剣技（わざ）とオイラの能力（わざ）があわされば　無敵になれるってことを！！」

葉がそう言い右手を出すと…阿弥陀丸がヒトダマになり、葉の掌に収納される。

「ヒッ！？ヒトダマになったっ！？」

「言っただろう　あの世とこの世を結ぶ者――――それがシャーマンだってな！！」

カッコよく説明する葉、その間にも不良たちはこっちに近づいて来る！

「サーモン？」

「食いてェのか！　コラァ！？」

声に出ていたのを聞いていたのか、間違った言葉を聞き返す不良た

ち。…おまえらもう喋るな。

「「死ねぇ――――――ッ」」

「行くぞ！」

葉はヒノタマを持った右手を身体の横に持って行き、そのまま身体に押しつけるようにヒノタマをねじ入れようとした。…が、その時！

「憑依合ッた「うるせぇーッ！！！人が喋ってるときに、口出しなんかしてんじゃねーぞ、コラァ――――――！！！！！（激怒）」

…え？」

葉が阿弥陀丸を入れようとした瞬間…話を邪魔されて苛々していた小太郎が怒りの雄叫びを上げ、こっちに向かってくる不良二人を殴りつける。

ドゴンッ！！！

「「ごふぉぉぉぉぉぉッ！！？」」

…決して人体を拳で殴っただけではしない鈍い音を響かせながら、不良たち二人は空中に吹っ飛ばされた。

『……ッえ？』

その光景を見ていた全員（阿弥陀丸含め）が空中にブッ飛ばされた不良たちを見る…。

そして吹き飛ばされた二人が地面に音を立てて落ちると、残った不良たちが叫び出す。

『えええええッ！？？』

「パッ！パンチ一発で…！？」

「あの二人がやられた！？」

「ていうか何だよあの音！？人間の出せる音じゃねぇ！！」
「どうなってんだこりゃあっ！！」
そりゃあ自分達より明らかに年下の奴にやられれば目を疑うだろう。
…運がないわ～コイツ等。

「あ――――ッムシャクシャするぅ！！！ここの霊共を叩き潰してストレス発散しようと思ったが…止めだッ！！テメー等で俺のストレスを発散させてやる！！！（ギロリッ！）」

小太郎はそう言うと不良たちの方に顔を向け、…まるで『闇魔』の如き形相で竜達を睨みつける。
睨まれた不良達は悲鳴を上げ明らかに腰が下がり、傍にいた葉達も顔が青くなる。

「なっ…！（なんだコイツッ…！？地味だと思っていたら滅茶苦茶喧嘩強えーじゃねぇか…！！てゆーかなんだよあのパンチ力…！ありゃ堅気なんてもんじゃねーぞ…！）」
明らかに身体を小刻みに揺らし、眼を見開きながら小太郎を見る竜。
…明らかにランクが違うッ！！！

「…あーッ！！思い出した！！！！…竜さん！そいつ『森羅の撲殺王』っスよ…！！」
…小太郎を見て思い出した不良…ボールボーイ（あだ名）は怯えながら小太郎を指差し叫ぶ。

『江碕　小太郎』…彼は学校で自分に喧嘩を売った者を残らず買い、片っ端っから叩き潰してきた。
そしてその事が噂になり、名を上げるために周辺の不良たちが小太郎に喧嘩を吹っ掛けて来たのだ。…だが、それでも小太郎は喧嘩を買い…その圧倒的すぎる暴力で全てを叩き潰す！！

それが切欠でさらにエスカレート。…同い年の中学生だけではなく、高校生、暴走族、警察、外人部隊…挙句の果てにヤの付く人たちまで狙われるようになった。だが…小太郎はそれをモノともせずに戦い続け、こっちに移ってきて半年間の間かすり傷一つ負う事もなく屍の上に立ち続けたのだ…。

…彼は戦う時、何故かいつも恐ろしい笑みを浮かべて喧嘩をすると言う。
笑みを浮かべたまま相手を叩き潰す姿はいつしか、全ての者が小太郎を見ると恐怖と尊敬の念でこう呼んだ。…『森羅の撲殺王』と…。

「こいつが…その『森羅の撲殺王』だと…！！？」
ボールボーイの言葉に驚愕する木刀の竜…。明らかに身体の震えが激しくなる。

「…チッ！チクショウ！！なめんじゃねぇぞ！！　コラァ！」
自暴自棄になった竜は木刀を振りかぶると、そのまま小太郎に突進していく…明らかにやられ役だっ！！

…振りかぶった木刀が小太郎に当たりそうになった瞬間！

「臓物ぶちまけて死ネやッコラァァァァァァァァァァァァァッ！！！！！！！！！（超怒）」
小太郎の怒りの籠った右アッパーが竜に向かって放たれる！！！

ドッゴ――――――ンッ！！！！！

「グッバァァァァァァァァァァッ！！！？」
振り下ろした木刀は小太郎の拳により砕け散り、そのままの勢いで竜の顎に突き刺さった。
…その攻撃を受けた竜は空中を飛び、仰向けになって地面に叩きつけられながら落ちて来た。

「ああっ」「竜さんが負けた――――――ッ！？」
『ぎゃあああ　逃げろ～～』
残っていた不良たちがそう言うと、竜を連れて全力で逃げていく…。

「ふぅ～～～ッ！…ま！少しはすっきりしたかなぁ…！」
あとには笑顔でそう言う小太郎と…それをポカーンと見ていた葉達だけが、この墓場に存在していなかった…。

こうして――――――――――
僕と葉くん、小太郎くんとの魂の世界を巡る冒険が始まったのです。

まん太

憑依合体での戦闘（？）（後書き）

小太郎「…やっぱ此処の霊共でストレス発散するか…」
残った全員「「《止めろッ（でござる）！！！》」」

突発的なネタ
「泣く子も黙る『木刀の竜さん』とは俺の事よ！」
「硫酸？」「化学薬品か！コラァ！？」

鬼人…ゲットだぜッ！！（ポ〇モン風）（前書き）

評価お願いします

鬼人…ゲットだぜッ！！（ポ〇モン風）

…『木刀の竜』を小太郎のアッパーで地面に沈めてから数日が経ち、小太郎達三人はまた、昼間に墓地に訪れていた。

「んん…！！白い雲　青い空　緑の匂い　やっぱ自然は気持ちいいわ！」

そんなユルユルな事を言いながら葉は崖に生えている木に寄りかかりながら座ると、とても気持ちよさそうに昼間の時間を満喫していた。

「…これが自然だって…？」

その葉の傍で体育座りをしながら辺りを見渡すまん太…そして、次の瞬間立ち上がり、

「どう見てもこれは！　不自然な光景だろ――――――っ！！」

目の前の崖の下にある墓場から、霊たちで溢れ返っている光景を見ながらまん太は泣きながら絶叫する。

「いいかげん慣れろよまん太　だから常に霊と共にある者――――それがシャーマンなんだぞ」

いちいち騒ぐまん太に葉は腕を後ろに回しながら言う。…いや、それでも普通にこの光景は無理だろ。

「ほれ、あそこにいるコータみたいに慣れればけっこう楽しいぞ」

そう言いながら葉は墓場にいる小太郎に指差す。それにつられてまん太が指を差した方向に目を向けると

「オラ、ウザッてーんだよ死人どもがッ！！！さっさと昇天して塵になれッ！！！！！」
…小太郎はいつものごとく霊達を足で踏みつけながら罵声を浴びせまくっていた。

「ちょっとお！？何やってんのコータ君！！？　やめなよっ！！！」
小太郎の行動にツッコミながら止めさせるまん太。…その言葉を聞いた小太郎は渋々やめると、そのまま葉達のいる崖の上まで戻って行った。

ちなみにコータと言うのは小太郎のあだ名であり、あの夜の事件以来、コータと葉達は学校でもつるむようになるまで仲良くなっていた。

…最初、小太郎に対してまん太は怖がっていたものの、基本的に話せば喋り合ったり出来るので、葉が間に入るなどし仲良くなるのも時間の問題だった。

…まあ、小太郎の喋り方は汚いが。

「常に霊と友のあるもの――――――でもその君がなんで東京に修行なんか――――！？」
「まあ修行っつうよりは仲間集めだな」
「仲間集め！？」
葉ののんびりした答えに大げさに叫ぶまん太。

「ああシャーマンの“格”はそのほとんどが自分に協力してくれる霊の“強さ”によってきまるんよ。
それは何も力に限ったことじゃない　知能・技術・あらゆるものに優れた霊を味方につければ付けるほど　いろんな時に役立つし一人

前のシャーマンとして認められることになる」
「じゃ君は一人前のシャーマンになるために一人で上京を…」
まん太が聞くと…葉は木から離れ崖に立つと、腕を組みながら町を見渡す。

「おう　だが集めがいはあるぞ～　なんつっても東京にはわんさといるからな
いろんな思いをこの世に残していまだに成仏しきれないでいる　強者の霊達が……！！」
真剣な表情でそう語る葉、その光景を見ていたまん太は尊敬の目で葉を見る。

（な…なんかスゴイな…ボンヤリしているようで　葉くんって実は…）
「というわけで　仲間になってくれよ阿弥陀丸」
「いきなりかーっ！」
葉のいきなりの勧誘発言に目を飛び出しながら驚くまん太。阿弥陀丸も突然でビックリしたのか、驚いた顔をして姿を現す。

《拙者を仲間に…！？》
「いやーこないだは憑依しそこなったけど気に入ったからさお前なら…」
《断る》
笑いながら葉は勧誘するが、阿弥陀丸に拒否される。

《こないだは拙者とお主の意思がたまたま一致しただけの事》
その言葉を聞いてはっとした表情をする葉。

《それなくしてお主に協力する筋合いはない　拙者ここを離れるつもりは毛頭ないのでな》

阿弥陀丸はそう言い、ギロリと音をたて葉を睨みつける。その行動にまん太は声を出し顔を青くする。

「えーっいいじゃないかそんなケチくさいこと言わなくったて」
「なんだ？葉はこのサムライが欲しいのか？…だったら暴力で屈服させればいい」
いつの間にか戻って来たコータ。葉は阿弥陀丸の答えに口を尖らせ、コータは手の指をボキボキ鳴らしながら阿弥陀丸を見つめる…こいつならやりそうだ！！

「はっ！？よっ！葉くん、コータくんちょっとこっちおいでッ！！」
「お？」「なんだ？」
まん太は葉とコータの腕を掴むと、墓場から引き連れて公園まで引っ張っていく。…そんな小さい体で良くそんな力があるな。

「ったく　何考えてるんだ君達は！！　よりによってあの侍を仲間にしようなんて！！」
公園まで連れて行き、二人をベンチに座らせたまん太は、二人の耳元でそう叫ぶ。…鼓膜破けるぞ？

「何がだよー」「ちょッ耳元で叫ぶな…」
「何って！！」

「あの侍は“鬼人”ってよばれてるんだよ！錯乱して自分のお殿様にさからい　何百人もの侍を斬り殺したって伝説がある恐ろしい奴なんだ！！」
まん太は阿弥陀丸の事を興奮して説明するが、それを聞いた二人にはあまり変化はない。

「んー鬼人かぁ」「鬼人ねぇ」
「そうだよ！だからやめとけってばさ」
二人は口にしながら悩むと、まん太も仲間にすることを止めさせようと説得する。

「そりゃホントに強そうだな　やっぱ仲間にした方が――――」
「そんなに怖そうな奴だったか？　鬼人じゃなくて奇人の間違いなんじゃね――――」
「だーっ！！こいつらやっぱり聞いちゃいねーっ」
が、やはり二人は話を聞いてはおらず、まん太は頭を掻き毟りながら叫ぶ。

「聞いてるって　でもアイツ本当は悪い奴じゃないと思うんよ。だってアイツと一つになった時なんかあったかかったから」
「あったかかった！？」
「まぁとにかく、もう少し調べてからまたアイツの所に行けばいいんじゃね？」
と言う事で明日、郷土資料館に行くことになった。

…で、翌日になり、やって来ました『ふんばりが丘郷土資料館』。三人は資料館に入り、今現在阿弥陀丸の刀が展示してある所に立っています。

「おおー！！　よくこんな物が残ってたな――――――！！」
「何でだろ…刃物って見ると、何故かテンション上がるよな――――！」
刀の前で大声を上げて興奮する葉に小太郎。まん太はそんな二人を後ろから見て呆れている。

「『春雨』…！！　６００年前に阿弥陀丸が使っていた刀か！」
目の前にあるのは昔からあるためか、刃が錆と罅が入った日本刀とこれまたシミなどで汚れた鞘がガラスに入って展示されていた。

「ねーもー帰ろうよー　それで何がわかるってのさー」
「いやーよくこんなの知ってたなお前！これなら充分な手がかりになるぞ！」
まん太の言葉に葉は嬉しそうに言葉を返す。…いや、これだけじゃあんまりわからない気がするが…

「そりゃー社会科見学でここはよく来るからね　でも手がかりなんてそこに書いてあることしか…」
「だから　そんなのこの刀の上でこっち見てる――――――この男に直接聞けばいんだよ」
葉がそう言いながら刀の上の空間を指すと…いきなり着物を着た幽霊が座りながら姿を現した！

「うわあ！！？」「なにい！！？」
突然現れたことに驚き叫び声を上げるまん太と小太郎。…コイツ、最近ビックリするの多いな。

「だだだ誰だこの人…！？」
《オ　オレ刀鍛冶の喪助！っつうかオレを見てビビらねえとはむしろ　そっちが誰だ》
霊…喪助も予想外の反応にビックリしながらまん太達に話しかける。
「だから…いきなり出て来るなって、…言ってんだろ――――がっっ！！！（激怒）」

バコンッ！！

《グハッッッ！！？》
突然現れた霊にビックリし、怒りながら顔面を殴り飛ばす小太郎。
殴られたことにより喪助は床に叩き付けられる。

「ちょっと！？いくらなんでも酷過ぎだよ…というか　前から思ってたけど霊に対して扱い酷過ぎない？」
「霊なんてサンドバックと一緒でしょ？」
「霊達可哀そすぎるよ！？　もう少し優しくしてあげなよ！！」
小太郎の冷酷すぎる言葉に全力で突っ込むまん太。…しばらくして喪助が殴られた場所を押さえながら立ち上がる。

《って～～！！　オレは霊になってから６００年経つが…殴り飛ばされたのは初めてだぞ…》
だろうな…むしろこれからの生活でもう二度と経験しないだろう。

「６００年って…！？」
「じゃあお前この刀のこと知ってるんだな」
《知ってるどころか俺は…！！　この刀の主を殺しちまった男だよ》
「！」
「ええっ！！あの鬼人を！？」
《バカヤロウ！　奴を鬼人なんて呼ぶんじゃねぇ…　何故なら奴とオレぁこの刀をわかちあった…
大親友だったんだからよ！》
「前置きはいいからサッサと喋れよ。…またぶん殴ってやろうか？」
《おめーなんなんだよ　さっきっから！？　黙って聞いてろっ！！》
喪助はガラスの上に座り直し、ぽつぽつと喋り出す。

…長くなるので省略。

喪助が涙ながらに話し終えると、傍にいたまん太は涙を流し…葉と小太郎はどうでも良さそうな顔をしている。

《奴はオレが殺したんだ！！だからせめて約束通り春雨を奴に渡すまで！！俺は死んでも死にきれねぇんだよ！！》

「なあんだ　そんなことか」

「どうでもいいからさっさと成仏しろよ　目障りだから」

《なんだとはなんだァ！！》

葉と小太郎の言葉に泣きながらツッコム喪助。…つか、小太郎言葉遣い酷すぎだろ。

「じゃー私に行けばいんだよ」

《？オイちょっと待て　何を言ってるんだお前は》

葉の言葉に疑問を漂わせる喪助。そりゃ突然言われりゃ誰だって戸惑う。

「あの人…本当はいい人だったんだね…」

《！！》

「だって…あの場所で６００年もずっと…　喪助さんのこと待ち続けているんだもの」

《ぅ…うそだろオイ…》

泣きながら言うまん太の言葉に反応する喪助…すると、見る見る内に目に涙をため鼻が赤くなる。

《あ…あのバカ野郎…　本当に待ってやがるとは…！！》

「バカはお前も一緒だろ！？　さあ早く阿弥陀丸んとこ行こうぜ」
「男が泣いてんじゃねぇよ　気持ち悪ぃ…存在自体鬱陶しいな、コイツ」
《ああもう！なんなんだよお前らは！！》
泣きながら感動していた喪助だが、葉と小太郎の自由すぎる発言により泣きながらツッコム…。

《だいたいどのツラ下げて行くんだよ春雨はボロのまんまだし　幽霊のオレには春雨に触る事さえ…》
まだウジウジ言う喪助に対し、それを見ていた小太郎は額の血管を浮き上がらせてイラっとする。

「お前にオイラの身体を貸してやる　なぜならオイラは――――シャーマンだからな！！」
葉はそう言い右手をかざすと喪助がヒトダマとなり、そのまま葉の身体の中に憑依させた。

その後…憑依した喪助は『春雨』を持って町の鍛冶屋に行き、ナマクラになった刀を打ち直した。
打った後、葉から離れると刀を渡すように託し、そのままあの世に成仏したのだった。

で、今は墓地に戻り目の前にいる阿弥陀丸に春雨を渡している所だ…。

「「待たせたな」だとさ」
「喪助さん、やっぱり合わせる顔がないいからって先にあの世へ行っちゃったよ…でもよかったね　この街に鍛冶屋があって」
「たくっ…メンドクサイことさせやがって…っ！」
《…そうか…なるほど　お主のしわざなら合点がいく　こんな刀を

打てるのは奴の外にいない…ったくあのバカ》
葉達の言葉に納得したのか、阿弥陀丸は座ったまま友人の悪口を言う…だが、その顔はとてもうれしそうだ。

《まさか　まだ成仏せずにいてこの刀をうってよこすとは　６０年も待たせやがって…！！》
「まぁお互いバカとしか言いようがないしな」
阿弥陀丸の言葉に言葉を返す小太郎。それを見ていた葉とまん太もお互いを見合わせ苦笑した。

…小太郎が言うと阿弥陀丸は立ち上がり、顔を笑いながら葉達を見る。

《今すぐにでも追っかけてってブン殴ってやりたいところだが　どうやら拙者があの世へ行けるのは――――もう少し　先の事になるらしいな》
その言葉を聞いた葉達は喜びの声を上げ、小太郎は取り合えず阿弥陀丸を殴ったのだった……。

こうして鬼人と呼ばれた侍　阿弥陀丸は葉君の仲間になった。
たった一夜にして郷土資料館の刀がピッカピカになった事件は「春雨の奇跡」として地方新聞の片隅に小さく掲載されたという。

まん太

鬼人…ゲットだぜッ！！（ポ〇モン風）（後書き）

小太郎「オイまん太。…何も言わずこれ付けてみろ」
まん太「…え、なにこれ？何で僕がこんなの付け「いいから！」…わかったよ…」

まん太は頭に猫耳を付けた

まん太「…これでいいの？」

…まん太が猫耳をつけると、小太郎と葉が互いの顔を見て頷き、言葉を放つ。

小・葉「「萌えですッ！！！」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9528y/

幽霊？拳で叩き伏せろッ！！！

2011年11月30日18時45分発行